



WORKERS COMMUNICATION

自己決定や共感はしてもしなくてもよいものか
H9.12.1/全日本社会教育連合会
社会教育52巻12号

NO.390



L・NETワークーズ通信

自己決定や共感はしてもしなくてもよいものか

昭和音楽大学短期大学部助教授

西村美東士 (mito)

自己決定しなけりゃいけないの？

いまの時代状況をこんな言葉で表せばよいのか。

生涯学習、ボランティア、地域活動における自己決定の重要性（西村「進しの生涯学習」学文社、97年）を授業で述べたとき、ある男子学生が「mitoちゃん、本気になって人生には

自己決定が重要だと思っているの？ そんなわけないでしょう」とぼくに言った。彼は、親の願うことばかりある採用試験を受けるという。ただし、どうしてもそこに入らなければ困るというわけではないから、一生懸命、受験勉強をするというつもりはない。試験を受けさえすれば親も納得してくれるだろうというのだ。たしかに、その

後も親元についてあげて、あぐさぐさずば、親も本人もそれで幸せ、ということとがもしれない。

先日、短大一年女子学生から次のような出席ペーパーが提出された。

自己決定自体、しても、しなくても、どちらでもよい。ただ、迷惑をかけた、かけられたりするのはいやだけど。

(思春期の少女の摂食障害のビデオを見て)私は彼女たちのことを可哀相とは思わない。本人はつらいとかいっているけれど、本人の願いどおり体重が激減しただけのこと。ビデオで彼女たちもいっていたとおり、「興気になって、かまってもらいたかった」からそうだった、つまり自己決定なのだから。

ほくは「の文章自体には誤りはないと思う。自己決定は権利であって、しなければいけないというものでもないし、また、現代社会においては、自己決定でも過らない、かえって損をするなどということがあるにも多すぎると。だから自己決定するなり自立をめざして周りに波乱を巻き起こすよりは、迷惑をかけるいようにおたがい気が通って生きているほうが大切、ということになる。ほかの学生の中には「自己決定活動の中に進まんかがあるはずがない」という者さえいるのだ。しかし、一方、それは、おたがいが通って生きているという現代の状況をも

生み出す結果にもつながっている。

共感とは義務ではない

次に、「可哀相とは思わない」である。文面上は、これがかなり正しいと思う。自分の行為が失敗したからといって、「同情」されるのはいやなものである。

しかし、そもそもこれらの思春期の逸脱行動さえも自己決定にきめてしまつてよいのか、さうには「自己決定」つまり、自分が決めたことなんですよと突き放してしまつてよいのか。ほくは、自己決定とは、選択の自由だけでなく、撤退、無為を含めて3つの自由の前提のもとに、過去や他人のせいにすることなく、「やりたかった」「自分のために」「自分の行動を決定することだ」と考えている。そして、さうには、さうでない事情がある他者に対しては(じつは自分自身にも自己決定できない事情はいつまでもいくらでもあるはず)、同情ではなく、相手の枠組で相手の理解しようとする、つまり、共感すること、人の痛みを知ることがとても重要だ。

だが、もう一度ひっくり返させてもらおう。たとえば教師には生徒に対する共感の理解が必要だといわれるが、それは教師の義務となつてののか。共感が義務だなんて、ちょっとおかしい。先のペーパーに対して、ある社会人女子学生から、次のようなレスポンスのペーパーがあった。

私は以前まで共感ということができない人間でした。心の中では共感していないのに、表面だけは共感してききました。私が「共感」を実感できるようになったきっかけは、勉強のために行ったエンカウンター(注・ホーネの出会い)のグループによる体験学習です。その特殊な環境の中で、情動を激しく揺さぶられ初めて他人の考え、感情を、感じられたことがありました。でも、その時は初めての体験だったのでよく理解できなかった。

ところが、そのあと、3年ぐらいたったら、人に「共感」できる自分がありました。自分とは違う枠組を認められるようになったという。か。そうしたら、他人にイライラすることも少なくなつて、いわゆる社会的に「いい人」ではない自分のことも好きになれるようになりました。

今日、紹介された「可哀相とは思わない」という人は、もしかしたら以前の私と同じように、共感の体験をもっていない人なのでは、と思います。

鬱の時代のなかで

たしかに、人に迷惑をかけることはいけないことといわれている。これに対して、自己決定や共感はいかなければいけないというものではない。しかし、社会人の彼女の場合は、共感体験

によつて社会性のほか、自己決定や自己優待も獲得することができ始めている。このように、自己決定の人生を歩きたい、自分を信頼し、共感しあつて生きていきたいという願いは禁欲できない潜在的願望であるはずだ。それを切つてもしまつてもよいもの」と割り切る。では、何が足る敗北感が流れているように思える。

先日、ある青少年施設の運営会議で、現代の時代の気分を「鬱」とする議論があった。鬱の時代のパワリーな空気ににはみんな飽きてしまつているのではない。さういふ時代に入つていくのが求められている自己決定活動は、大膽さでできる華々しいイベントではなく、一人ひとりの「鬱の深み」(西村「生涯学習がくろく」文芸社、91年)と静かに対面し、出会いの体験を味わうことである。「癒しのサンマ」(時間、空間、仲間)の三箇なのであろう。

注「癒しのサンマ」については、自著『癒しの生涯学習』インターネットのあじわい方とはくくみ方(「学文社」一九九七年)を見ていただけたらうれしい。

【Column】

E-MAIL

mlchohan@ppp.bekka.com.or.jp